

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：14301  
 研究種目：基盤研究(C)（一般）  
 研究期間：2017～2019  
 課題番号：17K02011  
 研究課題名（和文）カレン難民の日常生活における社会関係の形成—映像ドキュメンタリー制作に伴う考察

研究課題名（英文）Community Formation in Everyday Life Among Myanmar Refugees--Observations Based on the Production of a Documentary Film

研究代表者  
 直井 里予（NAOI, RIYO）  
 京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携研究員

研究者番号：50757614  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ビルマ内戦の難を逃れて難民として生活するカレン系ビルマ人（カレン難民）の社会生活の詳細を、映像を用いて記録・分析することである。本研究では、ビルマ・タイ国境（タイ側）の難民キャンプと再定住第三国を対象とし、カレン人難民コミュニティの社会関係の形成過程の考察を長期に行った。

さらに、撮り続けてきた映像をまとめ、滞日ビルマ人コミュニティ（東京）で上映し、ディスカッションを行った。映像を介したコミュニケーションを難民と行うことで、難民問題の背景となっている社会問題に、政治とは違った視点での新たな価値観の創出へとつながることを明らかにした。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

映像を用いた研究は新しい手法であるが、映像は、文章では説明しきれない複雑な人間の行為（表情や音声）や文化の変容など、地域や文化の多様な現実と相関関係を伝え、複眼的な解釈を促すことができる。また、映画を通して社会に存在するさまざまな価値観を理解共有することにより、新たな関係性や学問上でのパラダイムを作ることが可能であり、本研究の成果発表によりカレンに限らず難民全体に関する議論に新しい視点をもたらした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine the formation of a new community of Myanmar refugees after resettlement through the analysis of a documentary film recorded over a long period of time on the Burmese-Thailand border and resettlement countries. Refugees living in resettlement areas have multi-generational relationships with their families, with each other, and with people other than Karen. Few want to return to their homeland. The documentary film screening led to an improved understanding of the background situation of these refugees through the sharing of values, through raising awareness of the political issues that exist in refugee society through images, and by inspiring a discussion of the entirety of their lives.

研究分野：地域研究、映像社会学

キーワード：難民 第三国定住 ドキュメンタリー映画 地域研究 映像 カレン 日常生活 タイ

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

ビルマ(ミャンマー)では、最大民族ビルマ人主体の中央政権とカレン人など少数民族との間で60年以上も内戦が続き、多くの人々が難民として隣国タイに逃れた。1980年代にはタイ側に難民キャンプが相次いで設営され、現在、約10万人の難民(うち約8万人がカレン人)が、タイ側国境地帯にある7箇所のキャンプで暮らしている。

現在のビルマの民主化の動きにともない、2020年の帰還達成(及びキャンプの閉鎖)を目標に、ミャンマー側では、工業団地や住居の建設や、学校、保健所などの整備が進められ、2016年10月から帰還がはじまった。

カレン難民に関する先行研究は、政治的対立や民族問題の視点から難民たちの置かれている状況を説明したものや、難民当事者・支援者へのインタビュー調査から難民を生み出す構造を共時的に分析し理論化を進めたものが主であった。

しかし、通常の「安定した」社会とは異なり、難民コミュニティでは驚くべき速度で構成員や世代が入れ替わり、それに応じて人間関係やアイデンティティも次々に変容する。このような環境下で、難民は、家族間、カレン同士間、カレン以外の人々との間、世代間の関係性を重層化させている。先行研究では、こうした「難民の日常生活」という視点に立った調査分析は、重視されてこなかった。

そこで本研究では、難民の日常生活に着目し、難民の移動と定住をめぐる社会関係を長期的・通時的に調査分析した。またその主たる調査手段として、映像(映画)を使用した。映像を用いることで、何度も映像を見返し、調査対象者たちの表情や語りを再解釈する中で、関係性の考察が深まると考えた。そして、これまでの政治・民族対立の産物としての難民像や、理論的考察の対象としてではなく、映像が捉える難民たちの肉声や姿や背景に映る社会を通して、新たな世代の人間・社会関係の姿を提示することを試みた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ビルマ内戦の難を逃れて難民として生活するカレン系ビルマ人(カレン難民)の社会生活の詳細を、映像を用いて記録・分析することにある。そこで、1)ビルマ-タイ国境の難民キャンプ、2)再定住第三国、を対象とし、カレン人難民コミュニティの社会関係の形成過程の考察を行う。

難民をめぐる映像作品は、ともすればネガティブなイメージの創出に傾斜しがちであったが、研究代表者は、これまで描かれてきた難民イメージとは異なり、難民の日常生活に視点をおくことで、カレン難民の日常生活における人々の関係性をテーマとした映画を制作を通じたビルマ-タイ国境事情の理解と、第三国に再定住する難民の社会の理解を進めた。さらに、映像を媒体とする当事者と研究者の相互的な交渉を用いた、地域研究における有効的な手法を提示することを試みた。すなわち、本研究は、「難民の社会関係の議論」と「映像表象の議論」との二重構造をとる。

### 3. 研究の方法

本研究では、これまでの難民のアイデンティティ変容、および難民の日常実践生活の研究を発展させ、第三国の定住地(オーストラリア)で暮らす難民たちの新たな選択を通じたコミュニティの形成過程を考察した。また、タイ北西部に位置し、約4万人の難民が暮らすメーラ難民キャンプを中心にフィールド調査を実施した。

#### (1) 現地調査の実施

- ① 2017年3月  
タイでの調査、タイ・ビルマ国境での聞き取り調査。バンコクのチュラロンコン大学にて文献調査。
- ② 2017年3月～4月  
オーストラリア パースにて、第三国定住したカレン難民とビルマ難民の調査
- ③ 2018年3月  
タイでの調査、タイ・ビルマ国境での聞き取り調査。バンコクのチュラロンコン大学にて文献調査。

#### (2) 映像収集と編集及び分析作用

更に、ビデオカメラによる撮影を行い、難民の調査における撮影は2008年から2018年の間に約160時間に及ぶ調査記録映像のテープと併せ映像の分析をした。具体的には、現地での撮影を進めながら、これまで撮り続けてきた映像を総合して、映像を理論的に分析していき、フィールドにおける撮影者—非調査者の相互関係性を明らかにしていく。映像分析しながら、編集をすすめた。そして60分の映像作品を完成させ上映をした。

#### (3) 映像上映後のディスカッションとその分析

- ① 高田馬場のビルマ料理店にて、上映会を開催。学生と当事者(ビルマ難民とカレン難民)とのディスカッション。2018年10月。

- ② 龍谷大学の講義内にて、上映とディスカッションを行った。約 20 名の学部生対象。2017 年 5 月、2018 年 5 月、2019 年 5 月。
- ③ 神戸市シルバーカレッジ講義内にて、約 50 名の受講生対象に上映とディスカッションを行った。2017 年 12 月、2018 年 12 月、2019 年 11 月。

#### 4. 研究成果

本研究の実施期間(2017~2019年)では、まず、一年目(2017年)にオーストラリア(パース)にて、タイの難民キャンプから第三国定住したカレン難民の調査を行った。そして、アメリカにおける第三国定住の比較を行った。また、三年間にわたり、継続してビルマ・タイ国境のカレン難民キャンプにおける調査を行い、難民キャンプに暮らし続けざるおえない人々の日常生活を記録した。さらに、山形ドキュメンタリーフィルムライブラリーにて、難民に関する文献調査及び映像分析調査を行った。二年目(2018年)には、これまで撮り続けてきた映像をまとめ『OUR life—夢の終わり』を制作し、滞日ビルマ人コミュニティの高田馬場で上映し、上映後は、大学生や教員をむくめたディスカッションを行った。そして、三年目(2019年)には、それらの成果を、共著『越境の平和学—アジアにおける共生を和解』(金敬黙編著)の第8章「映像平和学への挑戦—カレン難民の越境と共生」にまとめ発表した。

本研究で明らかになった点は以下である。

##### 1. カレン難民の移動と定住をめぐる社会関係

本研究では、まず、難民キャンプで生まれ育ち、祖国ビルマを知らない若い世代の難民たちは、どのように日常生活を送り人々の関係性(家族間、カレン同士間、カレン以外の人々との間、世代間)を形成しているのかを考察した。

ビルマ政府の民主化に伴い、タイ政府は、2016年から2020年を目標とした全難民の帰還達成(及びキャンプ閉鎖)へと動き始めた。ビルマ国内では、難民帰還地用の工業団地や住居の建設や学校などの整備がはじまった。しかし、2008年11月時点では、帰還した難民は、300人にも至らなかった。

長年にわたり迫害を受けてきた難民のビルマ国軍に対する不信感は、新政権に移行しても、すぐに消えるわけではなかった。ビルマの民主化の動きに対しても、いまだ懐疑的な目でみている難民は少なくなかった。数十年にわたり、難民キャンプでの生活を強いられてきた難民たちの多くは、ビルマに戻ることは考えられないという。帰還後の定住地における生活環境への不安もある。難民の多くが、内戦中に親戚・家族単位で国境へと逃れてきた。

タイ・ビルマ国境に位置するメーラ難民キャンプは、設立から、長い年月が経っている環境において、カレン系ビルマ難民は、家族間、カレン同士間、カレン以外の人々との間、世代間の関係性を重層化させていた。そこでは、独自のコミュニティや文化が形成され、独自のアイデンティティを生み出し、あるいは変容させて日常生活を实践する者が増えていた。このため、難民たちの「故郷」の認識は多様であり、祖国への帰還を望まない者が少なくないことが明らかになった。難民の多くが、仕事環境や教育環境を考え、タイ国内に滞在することを望んでいる。

難民キャンプ内では、カレン人が80%を占める中、ビルマ人の他、モン人などの少数民族が居住していたことや、外国のNGOや宣教師などが外部からのキャンプへ出入りする中で、家族や友人たちとの会話、そして教育現場、民族行事や教会などの場所によるさまざまは人々たちとの出会いにより、難民キャンプで生まれ育った若者たちが「カレン」という民族意識の形成に影響をあたえていた一つの要因と言えよう。

では、難民たちは、第三国定住後、自身と定住地社会との間で自らのアイデンティティにどのように折り合いをつけて、関係性を形成しているのか。本研究では、タイ・ビルマ国境に位置する難民キャンプから第三国定住における難民たちの新たな選択を通じた社会関係の形成過程を考察した。

難民キャンプの中では、難民というよりは、カレンという意識が強まる一方、第三国定住地においては、他国から同じように内戦から逃れてきた難民と出会うことにより、カレン人というアイデンティティよりも、難民という意識が、キャンプ内にいた当時よりも強まる傾向がある。

では、彼らはどのように、自らの「カレン」というアイデンティティをもち続けているのだろうか。本研究では、第三国定住地におけるカレン難民のネットワークは、Facebookで広く、世界中で繋がりがあっていることが明らかになった。

そうした中で、難民たちは、第三国定住先を選ぶ際のみならず、故郷の情報も、インターネットを通して得ていた。カレン州で撮影された映像などが、YouTubeなどでアップされ、カレン難民の間で瞬時にシェアされていく。故郷へ帰国するか否か、ビルマ国内の情勢をカレン難民たちは、FBを頼りに探る。ビルマ国内における内戦が完全に終結し、和解が進み、持続的平和が保障されても、彼らの内戦における記憶は残りつづけている。また、第三国定住地で生まれた子どもたちは、英語を巧みに話し、現地コミュニティの適応も柔軟である。そうした子どもたちの教育や将来を考え、帰還地のインフラ整備などの生活基盤条件が揃いはじめた現在も、第三国定住した難民の、祖国への自発的帰還が進まない状況が続いている。

## 2. 地域研究における映像表象に関する考察

難民関連の既存の映像を閲覧・分析し、難民に関する映像表象とその変化過程を踏まえた上で、地域研究への学術的貢献としてどのような映像をめざし得るのかを考察した。その表象の可能性と限界を考慮した上で、難民に関する映画制作を行った。

また、撮影対象者との関係性の形成に関する考察をし、カメラがカレン難民の生活空間に入り込む際、撮影者と撮影対象者の関係性がどのように形成され、彼らの社会関係形成に影響し、映像がどのように表象されるかを明らかにした。

これまでの、カレン難民に関する映像は、学校教育や支援機関などの資本で制作された、難民支援や難民理解を強いる啓蒙的な類似作品が多くを占めていた。このような映像は、難民への関心を高める効果があるものの、難民の悲惨さや絶望感を強調した映像は、難民と非難民の我々との距離を生んでしまうことへ繋がっている。

そこで、本研究では、難民の日常生活を撮影し、映像をまとめて上映を行い、会場での当時者同士による討論会を国内で行った。具体的には、在日ビルマ人が多く住む高田馬場にて作品を上映し、カレン人にも上映会に参加してもらい、上映後に、観客と当事者同士のディスカッションを行った。そして、観客の難民に対するイメージが映像表象を介してどのように構成され、〈現実〉として受容されていくのか、オーディエンス・エスノグラフィーの方法論を用いて分析した。

その結果、映像上映後のディスカッションにおいて、さまざまな意見が交わされる中で、観る者は、自分とは異なる価値観を知り、自らの難民に対する固定観念に気づきをもたらした。さらに、難民の暮らす地域で上映会を開き、難民と受け入れ国の人々とのディスカッションは、調査者（映像作成者）への視点の変容にも繋がった。

本研究による、「難民」の日常生活の映像による観察は、一様には語れない複雑な背景（経験）と難民の「生の現実」を明らかにすることで、難民の日常生活を内側から描き、関係性の流動的で複雑な側面の分析をより深めた。また、上映会後のディスカッション（対話）は、観る者にとっての難民の存在が、「同情や共感」を超え、「他者」から、自らの日常の世界を構成する者として存在するようになることで、平和的共生が具体的に可能となることが明らかになった。

今後は、帰還先を含めた研究に移行する。第三国定住を選んだ子どもたちと別れ、難民キャンプに長年閉じ込められてきた年長者たち、また、第三国定住をしなかった（できなかった）難民キャンプで生まれた若者たちが、帰還後、祖国ビルマでどのようにして新たな関係を築き、何を拠り所として生活を送るのか、キャンプ閉鎖をめぐるカレン難民の帰還に関する分析・調査に焦点をあてて、難民の越境をめぐる研究を引き続き行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金 敬黙、森本 麻衣子、野中 章弘、鄭 康烈、南雲 勇多、直井 里予、安田 菜津紀	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法律文化社	5. 総ページ数 234
3. 書名 越境する平和学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----